都留文科大学研究紀要　第96集（2022年10月）
The Tsuru University Review, No.96（October, 2022）

内村鑑三　闘いの軌跡(十)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzō (Part 10)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第十章　紙上の教会と再臨待望

一　柏木への転居と今井館聖書講堂

柏木転居

角筈時代の内村鑑三は、角筈聖書研究会を熱心に主宰したばかりか、招かれるままに全国各地の伝道にも励んでいる。それは『聖書之研究』の販路を拡張することともかかわっていた。彼はプロテスタントの教派には、招かれればどこへも出向いて、説教や講演をした。この場合、教派の制度に縛られない無教会主義に立つ鑑三には、有利に働いた。彼は日本メソジスト教会をはじめ、長老派の日本基督教会のいくつもの教会でもしばしば話をした。他方、各地で誕生する教友会には、特別に力を入れた。雑誌『聖書之研究』はその拠点であり、〈紙上の教会〉としての役割を果たしていく。

日露戦争は終局に向かっていた。講和条約がアメリカ北東部、ニューハンプシャー州のポーツマスで行われ、一九〇五（明治三八）年九月五日に締結を見る。けれども、すべてが順調とはいかなかった。条約には賠償金などはなく、日本の朝鮮における権益の確認、満洲の租借権と鉄道の譲渡、それに樺太南半の割譲に留まったため、講和条約に反対する人々もおり、講和反対の国民大会も開かれ、警官の出動を見るという状況を伴った。こうした中でも、東京の新宿角筈での聖書研究会は続いた。けれども、一九〇六（明治三九）年の年明け一月十四日の角筈聖書研究会は、鑑三の発熱のため途中打ち切りとなるというハプニングもあった。何度かの休みの後、研

究会はやっと復活する。こうした状況下、鑑三は心機一転を求めるようになる。

父宜之の死後半年ほどした一九〇七年（明治四〇）年十一月一日、内村鑑三一家は、それまで住んでいた新宿角筈の地（角筈一〇一番地、女子独立学校の一角）を離れ、同じ新宿の柏木の地（柏木九一九番地の一）に転居した。『聖書之研究』92号（一九〇七・一〇・一〇刊行）には、「謹告」として、移転通知を載せたが、そこには「東京府下多摩郡淀橋町字柏木九百拾九番地」と公示地名を載せている。土地は借り物であり、鑑三はそこに住居と、のちに今井館と呼ばれることになる講堂を建てることになる。借地の面積は三百坪と伝えられるから、現在の住居感覚するとかなり広い。五十坪ほどの土地に家一軒とするなら、六軒も建つ。

鑑三の引っ越した新宿柏木の三百坪の地は、中央線の大久保駅北口から西へ、現在なら大久保通りを西へ約五分ほどのところにあった。が、当時大久保通りは、駅から少し行ったところまできり通じておらず、その先が完成するのは、鑑三没後の一九三五（昭和一〇）年以降なので、矢内原忠雄ら新しい弟子となる連中は、途中からくねくねと曲がる畑中の道を行ったのであろう。そこは現在の地番で言うと、新宿区の北新宿に相当する地域である。それまで住んでいた角筈同様、地名上の柏木の名は消えたものの、新宿区立柏木小学校や駅近くの日本キリスト教会柏木教会などに旧地名の残影をとどめる。

現在は大久保通りは整備されて、西に真っ直ぐに延びているが、それは一九三五（昭和一〇）年の都市計画による区画整備以降のことである。鑑三生存中の大久保道路は、地図を見ると、駅から二、三分で、北西へ行く道になってしまうので、前述のように、鑑三の講義や日曜礼拝での説教を聴きたい者は、畑中の道を行くほかなかったようだ。それ故、若者の足でも七、八分は優にかかったであろう。

なお、当時の内村邸と今井館聖書講堂は、右の大久保通りの拡張と周辺の区画整理のため取り壊された。今日、旧内村邸と今井館聖書講堂があったと思われるところに行くには、整備された大久保通りを西に行き、ローソンというコンビニを左に、対面に豆腐店のあるところ一帯と推定される。何せ三百坪もあった土地が、道路や住宅その他に変わっているので、ここと確定することは、土台無理なのであろう。それ故、鑑三の記念碑も、それとおぼしき地にそれぞれいくつか建つ。

大久保駅周辺には、現在、ハンドレッド・サーカス・イースト・タワーなど、舌を噛みそうな長い名の新宿副都心級の超高層ビル同様の、のっぽビルも見かけるようになったが、当時は駅周辺も農地ばかりで、豊かな田園風景が広がっていた。富士山が遠望できたという。が、令和の今日、その面影は全くない。この後述べるが、新渡戸稲造の紹介で多くの優秀な一高生や東大生が、鑑三の住むようになった、この柏木の地を訪れることとなるが、彼らは日曜日の朝の聖書研究会出席のため、本郷の寮や下宿から電車を乗り継いで大久保駅まで来て、北口を降りて、芋や野菜畑の広がる田園風景の続く道を足早に内村邸に向かったのであろう。若き知性溢れる彼らの期待に応えるものが、当時は東京郊外とされたその地に住む鑑三にはあったと言うべきか。

今井館聖書講堂のその後

今一度述べるが、柏木の地は、一九三五（昭和一〇）年の区画整備に伴う道路拡張のため、鑑三の借りていた三百坪の土地も引っかかり、そこにあった住宅や今井館聖書講堂と命名された建物も、その際取り壊されることになる。現地調査をしても、現在旧内村邸が、どの箇所にあったのかを判定するのは困難である。大久保道路整備以前と以後の地図とにらめっこしても、はっきりしない。新宿区でも、鑑三記念の標柱をどこに建てるかには苦慮したに違いない。強いてそれを求めるなら、現在の大久保通りのローソンというコンビニを左に、対面に豆腐屋のあるところ一帯としてよいのかも知れない。

今井館聖書講堂の建物は、幸い弟子たちの手で、原型をほぼ保ったまま、目黒区中根一～一四～九の静かな住宅地の一角の借地に移築された（注、二〇二一（令和三）年秋、文京区駒込六～一一～一五に再移転）。東横線の自由ヶ丘駅から数分の地である。わたしは本論を書くために、目黒の地に移築された今井館聖書講堂の脇に建った今井館資料館には数年通った。一方、柏木のそこと覚しき地には、「内村鑑三の柏木聖書講堂（今井館）旧蹟」（原文のまま）の標柱などが、新宿区によっていくつか建てられている。

なぜ、柏木へ転居したのかに関しては、鑑三自身の証言[1]があるので紹介したい。それは弟子の一人、岩本信二宛の便りに見出せる。該当箇所は、以下のようなものである。岩本は当時在米、働いて得た金を献金として捧げたいと送金して来たのに対する返礼である。

元の角筈の地は教会信者某より借受けし者なりし所、彼よりツマラナキ故障らしき事申出候に付き何の抵抗も為さず、何の要求も為さず、穏便に当柏木の地に移転致し候、而して神は我等の無抵抗主義を賞で給ひて三四の兄弟の手を経て移転に関わる入費を悉く支払はしめ給ひ、殊に旧宅の外に別に新宅を賜ひて信仰の兄弟の来て宿泊するの場所を備へしめ給ひ候、君の御寄附の如きも其為めに使用するを得て、一層深く聖手の懐かしきを感じ申し候、君が御帰国の節は先づ第一に此家を訪はれんことを願上候、是れ又君の家にして君は是に宿るの権利を有し候

角筈の地は、ある信者から借りていた土地で、移転を迫られたため、近くの柏木への転居を決めたのだという。鑑三はこの書簡でも、「無抵抗主義」を口にする。鑑三には「闘う人」のイメージがつきまとうが、無抵抗主義もまた、彼の闘いの一つであったのである。心機一転を求めての転居を考えていた鑑三の決断を促したのは、「信者某」の借地返還要求にあったというのだ。

鑑三の角筈時代は九年に及ぶ。それは苦闘の時代であった。彼は『聖書之研究』の94号（一九〇七・一二・一〇）に、その一端を記している。引用するならば、「角筈偽善者と云はれ、独立女学校の明渡し、東京独立雑誌の廃刊、父と母とを茲に失ひ、其他口にも筆にも尽し難き人生の苦き杯を茲に飲んだ」とある。けれども、その苦闘の内実を、彼は口を堅く閉ざして、その死に至るまで誰にも語らなかった。彼の闘いは、他者との闘いのみならず、己との闘いでもあったのだ。

今井樟太郎

鑑三転居先の柏木は、いわゆる北新宿の地に相当する。電車の駅で言うと、JR中央線の大久保駅である。現在は大都会東京の副都心につながる地となっているが、前述のように、当時はまだ芋畑の広がる田園であった。駅からも直線道路がなかったので、くねくねと曲がる田のあぜ道を行くほかなかったようだ。鑑三は自然の豊かに残る三百坪もの借地に、自らの住居と共に聖書を学ぶ場所としての建物を建てたのである。のち、今井館聖書講堂と名付けられる建物である。名称のいわれは、鑑三を尊敬した今井樟太郎という若くして世を去った人物から来る。

今では古典的名称となった今井館聖書講堂と今井樟太郎について、簡単に触れておこう。今井樟太郎は和歌山県の出身。一八六九（明治二）年十二月二十四日の生まれである。彼は大阪で香料店永廣堂を経営したが、一九〇六（明治三九）年六月五日、脳出血のため三十六歳の若さで急逝した。今井は若き日、神戸の組合派の教会で受洗したクリスチャンであり、『東京独立雑誌』の熱心な読者であった。

鑑三には今井樟太郎を悼んだ二つの文章がある。「今井樟太郎君逝く」（『聖書之研究』76号、一九〇六・六・一〇）と「今井樟太郎君追悼演説」（『基督教世界』一二四二号、一九〇七・六・二〇、『聖書之研究』89号、一九〇七・七・一〇に「友交の秘儀」と題し再録）である。前者で鑑三はその死を悼み、「余輩はキリストの福音のため、日本国実業界のため、君の遺族のためは勿論、余輩のため、本誌のため、此事ありしを悲むや実に切なり、君は屢々余輩を寂寥の中に慰め給へり、又幾回か余輩の欠乏を補ひて本誌の存続を助け給へり、而して今や此人逝く、余輩は余輩の心中に大なる空虚を感ぜずんばあらず」と書く。

後者は、今井樟太郎没後一週年の追悼会（大阪天満教会）での弔辞で、日本組合教会の機関誌『基督教世界』（週刊）に載ったもの。弔辞にしてはかなり長い（四〇〇字詰原稿用紙約一〇枚）もので、故人との出会いのはじめから語りはじめ、その信仰の生涯を的確に語り、感動を呼ぶ。特に独立雑誌社が分裂した鑑三失意の時代に、今井から受け取った手紙の紹介の箇所など、印象に残る。以下のようだ。

かく失望の淵に沈みつゝありし時に一日名も知らぬ一人の大阪人より一封の手紙を受取れり、不審ながら披き見るに短かき文句なりしも言々皆な同情の涙に満ちて、先生よ仮令世は悉く先生を棄つるとも決して失望し給ふ勿れ、神は先生の心を知り給へば必ずや世の誤解を解き給はん、願くは正義の為め患難のうちに一層の勇気を以て奮闘し給はんことを云々とありて、心より余の境遇に同情を表して神によりて余を慰めんとしたるなりき、嗚呼余が此手紙を読みし時の感は如何なりしか、世には只一人たりとも余の心事を知れる友ありと思ひし時の余の喜びは如何なりしか、此時余は暗夜の中に只一つの星を認めしなりき、失敗何かあらん、患難何かあらん、仮令世は挙つて余を棄つるとも未見の一友にして斯の如く余を思ふ者あらば我望は足れりと非常なる感激の情を以て再び勇気を振ひ起したりき、而して此未知の友は即ち故今井君にてありしなり、

今井樟太郎の手紙は、失意の鑑三を励ましたとのこと。その後、今井は「杳として音信を欠い」ていたものの、突然角筈の鑑三宅を

訪れ、事業がうまくいかなかった上に、友人の負債まで負って苦しんだが、鑑三の京都での講演と著書や雑誌の文章に励ましと勇気を得たと語る。その謝意を述べたいがための訪問であったという。鑑三は今井樟太郎に期待するものが多かったが、それは彼の突然の死によって絶たれる。結びは以下のようになっている。

今日今井君の一周年紀年会に於て氏の友人たりし諸君と共に深く考へんと欲する所なり、かへすがへすも我等はお互に我儕の肉体のうちに故今井君の霊を活かして彼れの志を継承する覚悟を固めんことを望んで措かざるなり、噫わが友は死せず、希くば諸君と共に永遠に今井君を紀年し、彼をして永久に我儕の衷に活かしむる契の約を立てしめよ。

今井館聖書講堂

柏木の土地に建った「聖書研究所」は、今井の死後、未亡人となった妻の信子からの一〇〇〇円をはじめとする寄付金によったものである。今井信子もまた、すぐれた信仰者であり、『聖書之研究』を愛読していた鑑三ファンであった。当時の一〇〇〇円は、現在の金額にすると約三八〇〇万円以上に相当しようか。それが基金となって、「聖書研究所」（今井館聖書講堂）は建ったのである。

柏木の今井館聖書講堂は、他にも前記岩本信二やアメリカのベルからの援助をはじめとする寄附金もあって、はじめて実現を見たものである。ベル宛便りには、そのことを語る以下のようなものがある。[2]

親愛なるベルさん

友人の一人からの寄付金一千円をもって――この友人はある寡婦ですが、その亡夫は大阪の一香料商で、多年私の小さな事業を熱心に支援してくれました――目下小さな聖書研究所（むしろその芽生えと称すべきですが）にあてるため、一小屋を建築中で、一、二ヶ月中に完成のはずです。もし何かの方法で助けて下されば、まことに有りがたく、聖書関係の最近の出版物のご寄付でも、他の方法でも結構です。もちろんこの小事業の今後に対する全責任は、私一人で負います。私はその所長であり、会計係であり、教授であり、筆頭支持者であり、そして同時に一切を負います！　小建築は合計六人の生徒を収容するはずです――まさに世界最大の神学校です！

アナタの　　内村鑑三

内村鑑三が当時の住居表示――東京府下淀橋町柏木九一九の新住居に移るのは、前述のように、一九〇七（明治四〇）年十一月一日のことである。現地は今や高層ビル群が間近に迫る大都会の一角で、昔の面影はない。

鑑三が女子独立学校の校長職に就くために、新宿角筈に移り住み、約八年半が経過していた。鑑三に「柏木に於ける最初の編輯」（『聖書之研究』94号（一九〇七・一二・一〇）という文章がある。そこで鑑三は、苦しかった角筈時代を顧み、「人をして我等を学校泥棒と呼ばしめ、偽善者と呼ばしめ、終には親殺しとまで呼ばしめし悪魔は尚ほ更らに一撃を加へずしては我等をして彼地を去らしめなかつ

た」とまで書き、「角筈の櫟林丘は我等に取りては終まで悪魔との戦闘場であつた」とまで言わせたほど、鑑三の人生にあって、角筈の地は厳しい「闘いの地」であったようだ。

再び言うが、鑑三はその闘いの内実を詳しく語らない。語らないでいることも、彼にとっては一つの闘いであったのである。鑑三にとって「闘い」とは、他者との闘いばかりか、自分との「闘い」でもあったことを再度指摘しておきたい。

一九〇八（明治四一）年一月十日発行の雑誌『聖書之研究』95号の「所感」と題された箇所に、鑑三は「我が信仰の告白 其二」ほか、いくつかの短い文章を載せている。前年十一月に柏木に転居した彼は、新年を迎えて心機一転、新たな歩みを目指していたのである。断章中の一編「新年と決心」で彼は言う。「決心又決心、決心を為すは決心を破るに等し、人は心を決して何事をも為す能はず、事を為すは神に在り、唯神に頼らんのみ、歳来るも歳去るも唯神に頼らんのみ」と。すべては神の計らいであり、自分はこの神に従って新しい年を生きるという決心が伝わってくる。

また、日露戦争の勝利を喜ぶ国民に、「戦争廃止の歌」で、「神の僕モーセの歌と羔の歌とは正義終局の勝利の歌なり、戦争絶対的廃止の歌なり、万物復興の歌なり、地の改善、民の充足の歌なり、歌は理想なり、未来の完全を今示されて之を視て歓びて発する声なり。黙示録十五章三節」との信念を書く。「黙示録十五章三節」は、神の怒りの前で「モーセの歌と羔の歌」をうたう勝利者を描いた箇所である。

「戦争の結果」では、「戦争は敵を絶たず、新たに敵を作る」という印象的な警句を書き留める。また、ここでも「ヨハネの黙示録」十三章十節の「凡そ人を虜にする者は己れ又虜にせられ、刀にて人を殺す者は己れ又刀にて殺さるべし、聖徒の忍耐と信仰茲に在り」を引いて、戦争の愚を諫めている。なお、この箇所の「聖徒の忍耐と信仰茲に在り」は、『新共同訳聖書』では、「ここに、聖なる者たちの忍耐と信仰が必要である」と翻訳されている。鑑三は柏木転居で心機一転、新たな前進を期していたのである。

前述のように、今井樟太郎の死後一年、未亡人となっていた今井の妻信子は、鑑三の事業のためにと一〇〇〇円の寄附を申し出ていた。鑑三はそれを基金として、柏木の敷地の自宅に隣接した場所に、聖書研究会や講義に用いる建物を建て、今井館聖書講堂と命名した。この建物に関しては、『追想集 内村鑑三先生』（岩波書店、一九三四・五）に名古屋常治という人（巻末の「執筆者紹介」には「東京在住の教友」とある）が、「今井館のことども」という文章を書いている。簡潔に鑑三生存中の今井館という建物の変遷を記しているので、引用しておく。

内村先生が角筈から柏木に移られて間もない頃、其の邸内の一部に一講堂と附属の日本家屋が建てられた。講堂は先生によつて「今井館」と命名され、大正八年大手町の大日本衛生会講堂に講演を始められる迄の十年余りの間、限られた弟子達への聖書講義の唯一の場所であつた。大手町時代も亦これを色々の集りの場所とせられたが、大正十二年の関東大震災に大手町講堂がなくなつてからは、内村聖書研究会は今井館に帰るの外なかつた。またそれが先生の望みでもあつたやうである。けれども大手町時代六百人以上の出席会員があつたが、震災後多少減

つたと云つても中々今井館では収容しきれるものではなかつた。それで講堂の拡張改造が行はれ（大正十三年一月十五日竣工感謝会が開かれた）、そして毎日曜午前午後の二回に分けて、先生御永眠の昭和五年三月まで、此の講堂に於て聖書講演が続けられたのであつた。

目黒自由が丘から駒込六義園脇に

一九三五（昭和一〇）年の都市計画法に伴う区画整理の対象となった今井館聖書講堂は、弟子たちの願いが叶い、東京目黒の地に移築され、その精神も引き継がれた。そして第二次世界大戦後は、鑑三の高弟、矢内原忠雄の日曜聖書講義の場となったり、無教会主義の各種団体の研究集会などにも用いられた。その後、建物の傷みと目黒の土地代の高騰もあり、二〇二〇（令和二）年秋に取り壊され、現在は文京区本駒込の六義園脇（東京都文京区本駒込六―一一―一六）に、その名と精神とを引き継いだ近代建築の建物となって現存する。

付言すると、今井館聖書講堂に関しては、柏木から目黒への移転を含めての詳しい考察に、高木謙次「今井館をめぐって」（『内村鑑三全集 月報34』、一九八三・七）が、また、その後の令和時代になっての文京区本駒込移転に関しては、大山綱夫の「今井館の移転について」（『今井館ニュース』第46号別刷、二〇二〇・四・三〇）それに、西永頌の「開館によせて」（『今井館ニュース』第52号、二〇二一・四・三〇）がある。

二　柏会と白雨会

祐之の腸チフスとルツの病

柏木への引っ越しの最中に、長男祐之（ゆうし）（満十歳）が腸チフスに罹った。腸チフスは、鑑三が横浜かずとの再婚直後に自ら罹った病でもあり、脳症なども併発する恐ろしさを彼は十分知っていた。それだけに心配は尋常でなかった。移転当時、近くの淀橋浄水場は完成していたものの、新居にはまだ水道は引かれていなかった。祐之のチフスは、井戸水からの汚染であったのかも知れない。

「子を失はんとして感あり」（『聖書之研究』94号、一九〇七・一二・一〇）の一文は、この時の体験を書いたものである。彼は言う。「余は子を有（もつ）て知れり、殊に彼を失はんとして知れり、余が世に供し得る最大の賜物は余の一子なることを、余は余の所有物（もちもの）を悉（ことごと）く供するを得べし、然り、場合に依りては余は余自身を供するを得べし、然れども余の一子を供するに至ては是れ難中の難なり、余が彼を供する時は余の一切を供する時なり」と。そしてヨハネ伝三章十六節の「それ神は其生み給へる一子を賜ふほどに世を愛し給へり」など、神の愛の深さを語る三つの聖句を掲げる。

鑑三の聖書理解や解釈には、常に現実が付きまとう。ヨーロッパの最新学説の紹介は少なく、多くは彼自身の現実や体験が結びついたところからの発想に立ち、それが彼の本格的聖書研究にも及ぶのである。むろん、聖書の言語であるギリシャ語やヘブル語の研究は怠らないが、その聖書解釈は、彼の現実と強く結びつくのであった。

祐之が腸チフスから回復した頃から、内村家では今度は娘のルツ

が病気勝ちとなり、鑑三の心を悩ましていた。ルツは鑑三にとって、戸籍上は二番目の女の子にあたるが、赤児の時代から手許で育てたこともあって、その慈しみ方は、尋常ではなかった。容貌は美人の母親のしづよりも父親似であった。今井館資料館に保存されている何枚かのルツの写真を見ても、彼女はやや武骨な所さえ宿した少女と受け取れる。もっと率直に言わせて貰うと、利かぬ気の闘争心を秘めた少女の面影である。そのきりりとした顔立ちは、鑑三の若き日の容貌にも似る。

鑑三自身も言っているが、ルツは決して美人ではない。世には「知的美人」ということばがあるが、それにも入らない。男性からはもてない、敬遠されそうなきびしい容貌である。重ねて言うが、母のしづは、総じて美人の部類に入るのだろう。彼女が人目を引く美しい人であったことは、何人かの弟子たちも証言する。その血筋は、どちらかというと男の子の祐之に伝わったかのようである。祐之は成長後、学生野球のピッチャーとして、満天下の人気を得る。祐之の名投手ぶりには母しづの父で、弓術家として知られた岡田透の血筋を持ち出す研究家もいる。他方、ルツはどういうわけか、鑑三の持って生まれた野人的容貌を嗣いだばかりか、その性格も父親似であった。彼女は実践高等女学校に学び、卒業後は家事をする傍ら、父の勧めで『聖書之研究』の編集見習いをしていた。ルツはその頃からすでに病気がちであったようだ。

ルツ発病のころ、柏木の内村家を訪ねてきた青年に、石原（旧姓鈴木）兵永（ひょうえ）がいた。後年、最晩年の鑑三を支えた人物である。最初の訪問日は、東京の青山師範学校に入学のため栃木県から兄保一郎に伴われての上京の折りであった。それは一九一〇（明治四三）年四月四日であった。するとこの年九月一高に入学し、翌年十月鑑三門入りする南原 繁や矢内原忠雄や三谷隆信らの鑑三訪問の一年半も前のことになる。

石原はその後、青山学院英文科を卒業、教員生活をしながら、弟子として鑑三を支えた。彼の著作『身近に接した内村鑑三』上・中・下（山本書店、一九七一・一二～一九七二・三）は、鑑三とその周辺の人々を描いた圧巻の回想記となっている。

高橋つさ子の死

ところで、岩手県花巻出身の高橋つさ子という不運な女性が、当時柏木の内村家に出入りしていた。つさ子は花巻の旧家に生まれた。同地の斎藤宗次郎を通して鑑三を知り、『聖書之研究』を熱心に読んでいた。十五歳の時に家出をして、鑑三に会いたいと東京を目指したが、途中で警察に保護される。しばらくして、つさ子は斎藤宗次郎の紹介状を手に内村家に行くが、親の許可を得ない状況と知った鑑三は、一晩泊まらせて花巻に戻す。つさ子は母親の許に帰ることも出来ず、花巻の斎藤家の世話になる。

その後鑑三はつさ子を不憫に思い、一九一一（明治四四）年三月に上京を許可し、内村家の家政婦をさせながら、当時多くあった女子の専門学校の一つである渡辺裁縫女学校（現在の東京家政大学の前身）に通わせることになる。が、つさ子は無理がたたってか、間もなく体調をくずし、斎藤宗次郎に伴われて花巻に帰郷した。

高橋つさ子は、この年（一九一一・明治四四）十一月三十日に心臓病で死去する。二十六歳の若さであった。鑑三は花巻からのつさ子死亡の電報を受け取るや、直ちに葬儀出席の電報を打ち、夜行列車

で花巻に向かう。娘ルツの病も重かったが、それを顧みずである。こうした場合、鑑三は実に義理堅かった。それは第一章で詳しく述べたような、佐幕派の没落士族の矜持でもあったのだろう。

つさ子の葬儀は、翌十二月一日、午後二時、花巻の宗青寺で行われた。鑑三に「高橋ツサ子」と題した一文がある。『聖書之研究』の一三八号（明治四五・一・一五）に載ったものである。時代に先んじた薄幸の日本婦人を称えた文章である。鑑三の筆は、この高潔な女性をよく理解し、表現する。例えば以下のような一文がある。

彼女の高潔に近づき難き所があつた。彼女は意に適はざればメッタに微笑をすらもらさなかつた、斯く言ひて彼女は勿論冷淡なる婦人ではなかつた、彼女の心の深き所には世に稀れに見る所の温情があつた、最も女らしき彼女は彼女の宿命と之に対する世の軽薄との故を以て大理石の如き白き冷たき表面を作るべく余儀なくせられた。

すぐれた、見事な人物評だと思う。一人の高潔な女性の生涯を語って、余すところがない。斎藤宗次郎の『恩師言 内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』[3]には、式場で「低声」で述べたという鑑三のことばが、以下のように要約されている。

皆様は此女を以て、ただ耶蘇教を信ずる頑固なるツマラナイ女であつたと思わるゝ乎も知れません、然し、私は思います、若し世が世ならば高橋つさ子は実にエライ女であると言われて世に尊まれたのであります。彼女は今の日本人に解せらるるには余りにエラクありました。彼女の理想は欧米人に聞かしても決して恥かしくない者であります。私は信じます。今より百年の後、日本人の思想が今日より遙かに進歩した暁には、この花巻の人達は「我等の中に高橋つさ子なる高潔なる女傑ありたり」と云いて天下に誇るでありましょうと、つさ子はまことに是れぞという社会的大事業を成しませんでした、然し彼女は社会を其根底より改めんとしました。彼女は先ず自己を改めました、而して後に家を、而して後に花巻の町を、而して後に日本をと彼女は計画したのであります。彼女は彼女の理想の余りに高きが故に早く仆れたのであります。彼女の失敗は彼女の無能の故でありません、彼女の生存せし社会の不完全なる故であります。彼女は此社会を救わんとて、之と闘って不撓不屈、終に彼女の主義のために仆れたのであります。

女権論者内村鑑三の一面を感じることのできる弔辞である。花巻の地に生まれ、育ち、『聖書之研究』や斎藤宗次郎の影響で信仰を得たものの、若くして没した高橋つさ子が、鑑三は不憫でならなかった。それは娘ルツへの愛情とも重なる。当時ルツは結核性の病で床に伏していて、重病の域にあった。

高橋つさ子の葬儀で花巻に滞在中、鑑三は同地の照井真臣乳（鑑三門下生、前述したように、宮沢賢治の小学校五年生の担任として知られる）の病気見舞いもしている。が、東京柏木からの〈ルツ病状悪化〉の電報に接し、直ちに東京に戻ることになる。当時の鑑三書簡には、危篤のルツの病状を告げたものがいくつかある。また、それにまつわる鑑三の感想も見出すことが出来る。

ルツの不治の病と浅田ノブ

『聖書之研究』一三八号（一九一二・一・一五）に載った「不治の病」と題する寸感めいた文章には、「世に不治の病多し、然れども是れ医学の立場より見ての不治なり、神の立場より見ての不治にあらず、全能の神に勿論不治の病あるなし、結核、胃癌、癲癇……彼は容易く之を癒すを得べし、我等は唯聖旨の成らんことを欲するのみ、病の難治の如き、敢て之を意に介せざるなり」とある。言うまでもなく、「不治の病」に取り憑かれたルツを念頭に置いての文章である。同じ号には「我等の希望」と題された文章も載っている。これは文末に「数回死を宣告せられし病女の救護を計りつゝある間に草す」とあるように、危篤状況にある娘ルツへの思いから生まれたものである。

ここには「愛する者との再会」の喜びも書かれている。鑑三は娘ルツの死をすでに覚悟していたのである。それでも彼は、この世の施術にも思いを馳せて、ルツの病に役立つものはいろいろと試みていた。ルツの病気が何であったかは断定はできないものの、どうやら前述のように結核であったらしい。戦前の日本では、死亡率がかなり高い水準にあった病である。鑑三は娘のことを思いやり、最善の治療を授けたいと願っていたのである。

一方、内村家の柏木移転前後の手不足状況を知った鑑三の長女にあたる浅田ノブは、上京して柏木の新居を訪れ、引っ越しの後始末や家事を手伝う。鑑三はノブのそうした態度に感謝しながらも、群馬県安中の養家の戸主浅田信芳のことを慮り、祐之の状況が少し安定するや否や、浅田家に帰すことにする。こうしたことにも鑑三は潔癖であった。『内村鑑三全集37「書簡二」』の一九〇七（明治四〇）年十一月二十日付で収録されている鑑三の浅田信芳宛書簡は、「筆写」となっている。これは「信子問題の解決」と冒頭題され、終わりにサインした「内村鑑三」の下に、印鑑まで押すということからして、公文書的扱いである。恐らくは投函されたものではなく、ノブの帰宅に際して、養父に見せるよう言い含めて持たせたものなのであろう。

すでに何度も言及したように、ノブは鑑三の最初の妻浅田タケとの間に出来た長女であり、安中のタケの兄、浅田信芳夫婦に子が出来なかったため、養女として育てられていたのである。ノブは群馬県立高崎高等女学校を卒業後、上京しては鑑三ともしばしば会うようになっていた。彼女は『聖書之研究』の熱心な読者で、津田英学塾にも学んだ。鑑三はノブの扱いには苦労した。ノブは戸籍上今や他人（浅田信芳）の子である。それなのに、たとえ本人の意志とは言え、内村家に置き、家事の手助けをしてもらうことに心が痛んだのである。

鑑三は祐之のチフスによる熱が引くと、すぐノブを浅田家のある群馬県安中に帰すことになる。後日譚となるが、ノブは安中に帰った後、群馬県の公立小学校の教員となり、同僚の日永初太郎と結婚する。そして子ども（日永康、後年無教会主義の伝道者になり、日永聖書集会を東京都町田市で主催した）も出来、比較的幸せな一生を送ることとなる。右の浅田信芳宛の文書「信子問題の解決」には、六つの条件が述べられている。はじめの三項で、ノブへの要求、信芳への要求、そして鑑三自身の責任をはっきりさせ、次にノブが①内村家に復籍した場合、②籍が浅田家のままである場合、さらに③今後の取るべき道の三つに分けて、ノブのことが真剣に考えられている。鑑

三はあくまで責任を持って、最初の妻で離婚したタケとの間に出来たノブの今後のことを考えていたのである。

祐之の病状が好転するや、追い返したにも等しい厳しい態度を、鑑三はノブに示したのだが、この三日後の同年十一月二十三日付ノブ宛便りでは、「拝啓、無事帰宅のこと〻存候、此程は使ひ立てばかりいたし、甚だ気の毒に存候、／祐之事昨日は最高度七度七分、今日は全く平熱にて元気も少し出で、且つ普通の大便の通じも有之、先づ是にて一安心致し候」と書き、ノブの柏木滞在中の労を謝し、さらには祐之の病状が快方に向かっているのを知らせるという丁寧な態度を取っている。

内村家の人手不足と柴田梅子

鑑三は種々のことを勘案し、ノブを毅然とした態度で帰宅させたものの、内村家の人手不足には頭を痛める。腸チフスの祐之ばかりか、それ以前から体調不良を訴え出した娘ルツの様子も、気がかりだったのである。妻のしづは家事と来客の接待に忙殺されていた。柏木転居と共に、来客は以前に増して多くなっていたのである。

鑑三はかつて不敬事件の際に、心労で死んだ前妻のことを思い出す。彼女は国賊の汚名を着せられ、しかもインフルエンザを煩い、床に就いていた鑑三に代わって、自宅にまで押し寄せた暴漢まがいの人々を、書生だった山岸壬五と共に立ち退かせるなど、事件の前面に立って苦労した。

その結果は病んで、若くして死を招いたのである。鑑三はそのことを決して忘れなかった。そうしたこともあって、彼には引っ越し疲れのしづの健康が心配であり、千葉県山武郡鳴浜村の海保竹松に、従姉妹にあたる梅子を手伝いに出してくれないかと「至急願用」の便りを出すことになる。

千葉県の鳴浜村（現、山武市）は、若き内村鑑三がかなり力を注いだ伝道地の一つであった（すでに第五章の三『房総伝道の開始と大阪泰西学館への就職』の項で、少し触れている）。その地の有力者海保竹松は、十年ほど前に東金で鑑三を招いての講演会を企画したほどの鑑三ファンであり、その後も、鑑三の特別講演会があると知るや、箱根・鎌倉・信州ばかりか、遠く北海道や岡山県にも同道するという人物であった。鑑三には、こうした心酔者が多い。が、彼はそれを喜ぶと同時に警戒もした。人物崇拝は偶像礼拝に繋がることを、鑑三は人一倍よく知っていたからである。

一方、ここで登場する梅子（柴田梅子）は、両親を早く亡くし、縁続きの竹松の家で養われていた。一九〇三（明治三六）年夏、当時まだ十五歳だった梅子は、鎌倉で開かれていた聖書研究会にいとこの竹松と出席し、鑑三夫婦の目に留まる。利発で愛らしかった彼女は、鑑三夫婦に認められ、この年の秋から一年二ヶ月ほどを角筈の内村家に、小間使いとして奉仕することになり、仕事の合間には聖書のことから礼儀作法までを教え込まれて帰宅している。そうしたこともあって、今回も内村家の援助を保護者に等しい海保竹松に頼んだのであった。

柏木転居で右往左往する中での祐之のチフス事件、それにルツの病も容易ならぬところに来ており、内村家では人手が足りず、どうにもならなかったからである。この要望に応えて、梅子は内村家の窮状を助けることになる。梅子はいとこの竹松からの話を聞いて、喜んで承諾する。なお、梅子は後、鑑三夫婦の執り成しで、鑑三門

下で芝浦製作所（のちの東芝）勤務の田中龍夫と結婚する。田中はのち無教会主義の伝道者となった。が、鑑三とは考えの違いがあって分離独立する。[6]

韓国併合

こうした中で、時代は一九一〇年代を迎えていた。一九一〇（明治四三）年は、対外的には韓国併合条約が成立した年である。一九〇四（明治三七）年以降、韓国の内政・外交権を掌握してきた日本は、韓国を領有・併合することになる。早く朝鮮支配をめぐっては、一八七六（明治九）年に、日本は韓国にとって不平等条約とされる日朝修好条規を押しつけ、朝鮮半島の支配を目論んでいた。その頃内務卿として実権を握っていた大久保利通は、旧士族の不満を外に向けようと、不平等条約とも言える日朝修好条規を韓国に押しつけたのである。

そうした前提のもと、日清、日露両戦争を一応勝利の名目のもと終えた日本は、隣国韓国を保護国化方針のもとに支配しようとした。一九一〇年五月三十日、桂太郎内閣は陸将寺内正毅（まさたけ）を韓国統監（陸軍大臣兼任）に任命し、八月二十二日、「韓国併合に関する日韓条約」に調印することとなる。韓国を併合する方針は、前年の七月六日の閣議で決定されていた。実行力があり、国民にも人気のあった寺内が韓国統監に就くや、まず警察権を日本に委任する。次に日本の憲兵を増派し、韓国警察をその下に置くという挙に出た。韓国併合条約は、この憲兵隊に護られながら行われたのである。以後、朝鮮は独立権を奪われ、日本は「韓国全部に関する一切の統治権」を掌握し、朝鮮を完全に植民地化することになる。

日本の国民の多くは、政府の韓国併合の政治的プロセスを是とした。それは領土獲得の意味を持って受け入れられたのである。内村鑑三はこうした日本国民の傾向を、冷静な態度を持って眺めていた。一九一〇（明治四三）年九月十日刊行の『聖書之研究』に寄せた鑑三の「領土と霊魂」は、短いものながら、印象的な文章である。これは明らかに朝鮮併合を喜ぶ国民への苦言と見られる。以下のようである。

国を獲（とり）たりとて喜ぶ民あり、国を失ひたりとて悲む民あり、然れども喜ぶ者は一時にして悲む者も亦一時なり、久しからずして二者同じく主の台前に立たん、而して其身に在りて為せし所に循（よ）りて鞫（さば）かれん、人、若（も）し全世界を獲るとも其霊魂を喪はゞ何の益あらんや、若し我領土膨張して全世界を含有するに至るも我が霊魂を失はゞ我は奈何（いか）にせん。

大逆事件と蘆花「謀叛論」

ところで、韓国併合のあった一九一〇（明治四三）年という年は、国内で史上特筆される大逆事件が起きた年でもあった。大逆事件とは、幸徳秋水をはじめとする社会主義者が、明治天皇を暗殺しようとしたという事件で、起訴された者は、幸徳のほか、菅野（かんの）スガ・宮下太吉・新村（にいむら）忠雄・古河力作・森近運平・奥宮健之ら二十六名に及んだ。これは「でっちあげ事件」とささやかれた。彼らは大審院において非公開の裁判にかけられ、翌年一月十八日には早くも判決が出、幸徳秋水ら二十四名に死刑の判決が、うち十四名が早々に処刑される。

このことを知って怒った徳冨蘆花は、一九一一（明治四四）年二月一日、第一高等学校第一大教場で「謀叛論」と題した講演を行った。わたしは前著『評伝矢内原忠雄』（新教出版社、二〇一九・四）の第二章に、「蘆花「謀叛論」の波紋」の項目を立て、詳しく論じているので、詳細はそちらに譲りたい。それはわたしが芥川龍之介研究の途次に、避けて通れない重大な問題としてしばしば論じ、少しずつ内容を深めてきた課題の集大成とも言える論述である。

これまで芥川龍之介と蘆花「謀叛論」に関して論じたものは、わたしの一連の論考以外にも、佐藤嗣男の『芥川龍之介 その文学の、地下水を探る』（おうふう、二〇〇一・三）収録の緒論をはじめ、誠実な論がいくつかあった。が、わたしの前著『評伝矢内原忠雄』の第二章「蘆花「謀叛論」の波紋」のように、その友人―松岡 譲・恒藤恭・矢内原忠雄らの当時の「日記」や回想記などを踏まえて、徹底的に調べ上げ、考え抜き、その上で結論としてその意味を論じたものはなかった。それはわたしの資料探索の成果であり、芥川周辺の人々への関心があってはじめて達成できたものなのである。その端緒は、漱石の弟子、松岡 譲研究の途次に出合った「蘆花の演説」（初出『政界往来』一九五一・一）という、松岡のエッセイにあった。

このエッセイで松岡 譲は、当時四十三歳だった蘆花の風貌、その「壮漢」かとも見えた姿に見惚れたことにはじまり、次に「訥々（とつとつ）」としたしゃべり方で、大逆事件に対する政府の処置のまずさを「全身で叫ぶ」という気迫あふれる態度で批判した蘆花を描く。そこには蘆花の演説に対し、「首相桂太郎に対する弾劾といつてもいい程不満をぶちまけたもの」とあり、「大いに感激し興奮していた」ともある。以後わたしは松岡のこの一文を足がかりに、蘆花の演説を聴いた近代日本の知的青年の政治への関心が、いかに高まり、展開したかを考え続けた。

蘆花の演説は、一九一〇年九月に一高に入学した新入生の歓迎の意味を込めて、一高弁論部が計画、実施したものであった。それは当日、演説会場に足を運んだ者ばかりでなく、後日の教室に於ける仲間の話題を通し、あるいは新聞『萬朝報』の報道、全学集会での新渡戸校長の訓話なども含め、全校生一人一人の心に強く刻まれた演説であり、事件であったという結論は、ここでも重複を厭わず、あえて書き留めておきたい。

当日の蘆花の演説に強い感動を受けた知的青年たちが、後年、京大事件（恒藤恭）や矢内原事件（矢内原忠雄）を起こし、中央集権国家の強権政治に〈謀叛の叫び〉を挙げるというわたしの推論は、若き日に松岡 譲の「蘆花の演説」に巡り合ったことにある。

なお、拙著『評伝矢内原忠雄』の第二章の「三 蘆花「謀反論」の波紋」に焦点を当てての湯浅拓也の書評（『図書新聞』二〇一九・一〇・一二）は、時代状況を的確に捉えての蘆花演説の意義と当時の一高生の営為を考え直していて参考になる。

新渡戸稲造の紹介で、優秀な学生が鑑三門下に集まる

大逆事件の起きた年、一九一〇（明治四三）年九月、第一高等学校（略称一高）に入学した青年には、後年学者や作家として名を成した者が多かった。そのことは、政府の公報である『官報』（第八一三七号、明治四十三年八月五日 金曜日 印刷局）を見るとすぐわかる。主要な人物を書き抜くと矢内原忠雄・宇佐美六郎・三谷隆信・長崎太郎・芥川龍之介・恒藤 恭・菊池 寛・久米正雄・佐野文夫・藤森成

吉・倉田百三・秦豊吉・森田浩一らである。

また、この年の前後に一高に入学した人々のことも、『官報』ではたやすく確認できる。一年上には石田三治・近衛文麿・坂田祐・本位田祥夫・豊島与志雄らが、二年上には江原萬里（当時人々は萬里を「まさと」と読むことが多かったが、没後刊行された全集奥付には、「ばんり」のルビを振っているので、それに従う）・河合榮治郎・河上丈太郎・高木八尺・田中耕太郎らの名が見える。彼らの中の幾人もが、一高校長新渡戸稲造の感化のもと、内村鑑三の集会に出席し、強い影響を受けるようになるのであった。

これまで詳しく見てきたように当時の鑑三は、主催する日曜日の聖書研究会に精を出していた。彼は雑誌『聖書之研究』を主催し、そこに載せた記事や研究で、多くの若者を引き付けて行く。五十代を迎えた鑑三は、今井館聖書講堂というよき場も得て、ようやく落ち着いて己に託された伝道と聖書研究という使命に、一路邁進していた。そこに若く優秀な一高生をはじめとする知的青年が、校長新渡戸稲造の紹介状を持って訪れるようになるのであった。

『内村鑑三全集40』収録の「年譜」（鈴木範久編）の一九一〇（明治四三）年前後の項を見ると、鑑三の伝道地は、東京新宿柏木での聖書研究会ばかりでなく、宇都宮・鳴浜（千葉県）・花巻（岩手県）・山形・本宮（福島県）とかなりの場所に及ぶ。彼の本格的伝道活動は、軌道に乗ったかの感がある。また「年譜」の一九一〇年七月三日の項には、「自宅隣のW・グンデルト宅が、同人の新潟県村松への転居の為に空き、これを借用改築してルーテル館と名づけ開館する」とあり、続くところで「九月二五日、ルーテル館で「ルーテル伝講話」を開講する」ともある。ルーテル（ルター）は、言うまでもなく鑑三の愛した宗教改革者である。

ここに来て鑑三は、敷地三百坪に建つ自宅と今井館聖書講堂に加え、広さは不明ながら、ルーテル館と名付けた建物をも手にしたことになる。伝道体制は整ったと言ってよいのであろう。そうした彼の許に、一高校長新渡戸稲造の紹介状をもって、優秀な若者が集いはじめたのである。

新渡戸はこれまでしばしば述べてきたように、鑑三の東京英語学校、そして札幌農学校時代からの親しい友である。彼は鑑三より一足先に、一八八四（明治一七）年にアメリカに留学、ジョンズ・ホプキンズ大学に学び、さらにドイツに渡り、ボン、ベルリン、ハレ大学などで研究を続け、帰国後は札幌農学校、台湾総督府技師、京都大学教授などを経、内村鑑三が新宿柏木に今井館聖書講堂を建てた一九〇七（明治四〇）年の頃は、第一高等学校の校長であった。

一高校長時代の新渡戸稲造

一高校長時代の新渡戸は、その人格が信望を集め、多くの学生から慕われ、名校長とされていた。が、一部には新渡戸校長反対者がおり、排斥運動もあった。そのことは、矢内原忠雄や近年相次いで発見され、公開された恒藤恭・森田浩一ら、一九一〇（明治四三）年一高入学組の当時の「日記」に、詳しく誌されている。中でも後年新渡戸の学説の衣鉢を継いで、東京大学経済学部で植民地論を講じた矢内原忠雄は、「日記」や著作『余の尊敬する人物』[4]に、一高校長時代の新渡戸の風貌や語り口までを記録に残した。また、矢内原忠雄と同期に当たる後年の哲学者藤岡蔵六も、回想記『父と子』[5]に新渡戸校長を採り上げ、「私達の眼を国際的に開き、自由を愛し

平和を喜ぶ気風を養い、偏狭なる愛国主義や固陋なる国粋論に陥ることを防いだのは、先生の感化力に負う所が頗る大きい」とまで述べている。

開明的で、学生への思いやりが深かった新渡戸校長の許には、優秀な学生が自然と集まる。彼は学生を愛し、一高近くに家を借りては、週一回の面会日を用意し、学生との交流を深めていた。一高・東大の教師時代の新渡戸に関しては、他にも多くのよき証言がある。その一、二を『新渡戸稲造全集 別巻』[6]から拾ってみよう。まず、後年政治家となり、戦後、第一次鳩山内閣で厚生大臣を務めた鶴見祐輔は、「明治三十九年の秋、たしか九月の中ごろであつたと思ふ、私は大学の一回生として、一高の倫理講堂ではじめて先生の英姿を檀上に見上げて、若々しい感激に胸を躍らせたのであつた。それから大学時代四年を通じて、先生は私の精神的の光として、悩み多き青春の道を照らして下さつたのであつた」と回想する。また、後年日本赤十字社社長や東京府の知事を務めた川西實三は、「先生を校長と仰いだ第一高等学校に入学してから、先生がお亡くなりになる迄三十年、記憶力の貧弱な自分でも、その間に於ける先生の思ひ出を綴れば、優に一冊の本が出来るやうに思ふ」とまで書く。

時は満ちたというべきか。「時」とは、『旧約聖書』「コヘレトの言葉」3―1の「何事にも時があり　天の下の出来事にはすべて定められた時がある」の時である。川西實三は矢内原忠雄の旧制神戸中学校（略称、神中）の先輩であり、その四年上級に当たる。彼はまだ神戸中学校在学中の矢内原に宛てて、しばしば便りを書き、新渡戸校長を絶賛し、一高への進学を強く勧めた。そして入学以前の矢内原に一高の状況を説明し、矢内原が一高の試験前に上京した際には、柏木で開かれた内村鑑三の講演会にも連れて行っている。

一九一〇（明治四三）年六月四日に開かれたこの講演会は、「スチーブン・ジラードの話」と題されたもので、矢内原忠雄がはじめてこの偉大な師、内村鑑三の講演を聴いた日となる。川西實三は、新渡戸の紹介で、前年一九〇九（明治四二）年に柏木の内村鑑三の集会に出席し、内村門下生となっていたのである。

柏会の誕生

当時、一高生や東京帝大の学生などで形成された新渡戸稲造を囲む読書会があった。が、新渡戸は校長職もあって、なにかと忙しく、これら学生の聖書の指導を、内村鑑三に委ねることになる。鑑三は柏木に移って二年、ようやくその伝道も緒に就き、聖書研究会は軌道に乗りはじめていたので、よろこんで彼らを受け入れることになる。塚本虎二の『内村鑑三先生と私』[7]には、その頃のことが、次のように回想されている。

明治四十一、二年の頃、時の第一高等学校長新渡戸稲造先生の高き風格を慕つて集つた一団の人々によつて、一つの読書会が組成されてゐた。会員は殆ど全部が一高及び帝大の学生または卒業生であつて、一高弁論部及びその先輩の秀才達を網羅してゐた。この会員中に、故陸軍大将黒木為禎伯の令嗣三次君があつた。彼は、今は有名なる小説家、当時はなほ学習院学生であつた志賀直哉君を介して、二、三年前より内村鑑三先生の聖書研究会に出席しつつあつた。読書会の人々は彼より内村先生のことを聞き、先生に接近したき願望が漸次濃厚となつた。黒

木君をもつてその希望が先生に伝へられた。先生もまたこれを喜ばれた。遂に新渡戸先生よりの紹介状を持つてこの十数人の一団が内村先生の門下に馳せ参ずるに至つた。四十二年の秋のことである。先生によつてこの会は「柏会」と命名された。その年の十月二十九日に、柏木の先生のお宅でその第一回が開かれた。

ここに見られるように、具体的には当時の優秀な一高生や東大生を鑑三の許に案内したのは、黒木三次であり、黒木を鑑三に紹介したのは若き志賀直哉であった。なお、塚本虎二の右の回想には、柏会の第一回の会合が「柏木の先生のお宅」で開かれたとされているが、正確には今井館であった。第一回の会合で内村鑑三の話を聴いた後年の独立伝道者藤井武は、「先生と私」[8]に以下のよう記す。

その夜一たび先生に接して親しくお話を聴いて居るうちに、不思議にも私の心は燃えた。先生が若かりし日にいかに単純にその信仰を護らうと欲して、或る時教育勅語の前に頭を垂るることを拒まれたか（いはゆる不敬事件とは是である。伝へられるやうに御真影に対してではない。私たちは直接先生からその事を聴いた）。この正直なる信仰表白の故にいかにそのために枕する所をさへ失ひ、遂には最愛の夫人の死といふ苦杯をさへ飲まれたか。およそ是等の古き事実が新に私を撃つた。今の時に当り信仰のために是だけの犠牲を辞さない人がわが日本に果して幾人あるであらう。とにかく此人は尋常の人ではない。自分は今ここに希有なる人格の前に在るのである。さういふ感じが切りにした。つまり先生の存在が一つの大きな事実として私の心を圧した。さうして新しき尊敬の念ひの先生に対して湧き起るを禁じ得なかつた。たしかにその夜わたしは先生を発見したのであつた。

柏会は毎日曜日に定期的に集会を持った。先の塚本虎二の「内村鑑三先生と私」には、「会は大抵讃美歌、黙祷、感話、讃美歌、黙祷といつた順序であつた」とある。「感話」とは、『広辞苑』をはじめ、現代の各種日本語辞典には出て来ないことばであるが、ここでは信仰に関しての話とでも言ったらよいのであろう。いや、もっと積極的に言うなら、自己のキリスト教体験、今日のプロテスタント教会でもしばしば行われる「証」とよばれる信仰告白を指すとしてよい。このことば、――「感話」は、今日でも無教会主義に立つ集会で好んで用いられている。当初の柏会メンバーは、右記の人々のほか、石川鉄雄・前田多門・岩永祐吉・沢田廉三・森戸辰男・三谷隆正・金井 清・黒崎幸吉・高木八尺らであった。

柏会には翌年の一九一〇（明治四三）年九月、一高入学の矢内原忠雄・宇佐見六郎・三谷隆信ら、多くは法科志望の学生が次の年に入会し、活況を呈していく。鑑三は毎週金曜日には、彼らに信仰の話をしている。彼は一高生や東京帝大に進学した大学生や、東京商大生に期待した。一九一一（明治四四）年十月一日（日曜日）の午前の会には、多くの一高生が出席した。当日初めて出席した矢内原忠雄に、この日を回想した印象的な一編の詩、「十月一日」[9]がある。わたしの前著『評伝矢内原忠雄』（新教出版社、二〇一九・五）にその全文を引用し、コメントを付しておいたので、参照して頂けるなら幸いである。

白雨会

ところで、同じ時期に今井館に集まり、鑑三の指導によって生まれ、育てられた会があった。メンバーは、一高生と東京商大生の幾人かで結成されたもので、南原 繁・石田三治・坂田 祐・松本実三ら一高生と佐藤禎一・高谷道雄ら東京高商生のグループ、それに慶応の鈴木錠之助などで、一九一一(明治四四)年二月四日に、鑑三が「白雨会」と命名した。命名のいわれは、旧約聖書「詩篇」第六五篇一〇節の「なんじ畩をおほいにうるほし畝をたひらかにし白雨にてこれをやはらかにし、その萌芽るを祝し」(文語訳『舊新約聖書』)に依っている。

一九一〇(明治四三)年九月入学の一高生の多くが内村鑑三を訪ね、その集会にはじめて列席するのは、右に記したように、翌一九一一(明治四四)年十月一日、日曜日の午前の会からであった。ここにはやがて柏会に入会する矢内原忠雄や三谷隆信らのほかに、白雨会を結成する南原繁や坂田祐らもいた。

先に触れた矢内原忠雄の詩「十月一日」の一節には、「講義は詩篇第六五篇であつた、／きびしいお顔に悲哀が溢れ、／するどいお眼にいつくしみが宿った。／少くも一年は続けて来よと言われた」とあり、当日の聖書研究が「詩篇第六五篇」であったこと、そして「少くも一年は続けて来よ」と鑑三が告げた印象的なことどもが織り込まれていた。鑑三の門下となった初めての日は、将来有望な青年たちに、後年に残る強い思い出を与えたのである。

鑑三の指導した東京帝大や一高のグループ、それに商大生らは、柏会と白雨会に分かれるが、後者は、少数精鋭であり、一時は十数名いたものの、最終的には七名という切りのよいところに収まる。まさにウイリアム・ワーズワースの詩に言う"We are Seven"なのである。ちなみに南原繁はもちろん、矢内原忠雄ら内村鑑三門下の一高法科生も、当時、文科の学生に劣らず皆、ワーズワースに関心を懐いていたのだ。

この年十二月二十三日のクリスマス晩餐会の席上、彼らは坂田祐の呼びかけで、新たな会を作ることを決め、翌年一月三十日に発会式を行った。鑑三が「白雨会」と命名したのは、坂田 祐の『新編恩寵の生涯』[10]によると、この年二月四日のことであった。彼らは後年まで強い結束を保ち、"We are Seven"を誇りにした。ちなみに南原 繁の令孫田上望さんによると、南原 繁はこの英語の一句を晩年になっても口にし、若き日の信仰の交わりの場であった白雨会を誇りにしていたという[11]。

三　長女ルツの死の衝撃

ルツの病は何であったか

内村家が柏木に移る以前から、鑑三の娘ルツは、重い病に取り憑かれていた。彼女の病が何であったかは確定できないものの、現代医学に照らすなら、症状からして結核の一種との診断が出来るのかも知れない。ルツはこの年(一九一一)実践女学校を卒業し、鑑三の勧めで聖書研究社で働いていた。その頃聖書研究社は、発展途上にあり、注文受付や発送などで、人手を要していたのである。

成長したルツは鑑三似で、ややごつい風貌ながら、強い信仰の持ち主として育っていた。鑑三には何物にも代え難い秘蔵っ子であった。彼女は働きはじめて三ヶ月、高熱を発して倒れた。熱はなかな

か去らなかった。同時並行的に生じた高橋つさ子の上京、病に犯されての帰郷、そして死に至るというプロセスは、鑑三一家にとって、人ごとではなかった。

子煩悩の鑑三は、さまざまな治療法をルツにさせたものの、ルツの発熱はなかなか治まらなかった。結核は当時「不治の病」とされた難病である。抗生物質のペニシリンなど、新薬のなかった時代のことだ。鑑三は当時よいとされた、あらゆる治療をルツに施した。また、転地療法も試みた。国民健康保険法などない時代ゆえ、治療代も厖大なものとなるが、鑑三は省みる暇もなかった。初夏になっても、ルツの病は好転せず、鑑三の悩みは尽きなかった。

そうした中でも鑑三は、『聖書之研究』の刊行に努力し、この年（一九一一）六月六日、火曜日の夜には、今井樟太郎の没後五周年記念講演会を今井館で開き、イギリスの政治家ジョン・ブライトについて語っている。当夜は後年ドイツ文学者となる若き一高生山田幸三郎も出席していた。また、矢内原忠雄は当夜の「日記」に、「故今井氏記念講演にて John Bright の話ありたり。丁度昨年の今日此の頃はじめて實ちやん（注、川西實三）に伴はれてこゝへ内村先生の Stephen Gerald のお話を聞きに来たるなり。内村先生のお話をきくと実に身がしまる。どうしても僕などは時に強き刺激を必要とする」と書き付けた。鑑三のことばには、「身がしまる」力があった、「強き刺激」があったとは、若き矢内原忠雄の実感であったようだ。

岡田式静座法

なお、鑑三の頼ったルツの治療法の一つに岡田式静座法なるものがあった。これは岡田虎二郎というアメリカで修業した整体師による呼吸法を基とした難病治療法である。岡田は当時、東京日暮里の本行寺を借りて、静座会という会を主催し、身心衰弱者の救済を行っていた。いわゆる「岡田式呼吸静座法」である。彼の許に集まり、その静座法に取り組んだ著名人には、木下尚江・田中正造・高田早苗・坪内逍遥・安田善治郎・渋沢栄一・島村抱月などもいたというから、当時の著名人の多くを虜にしていたことになる。鑑三もその噂を聞いて、ルツにそれを試みることになる。

鑑三の弟子矢内原忠雄と一高同期で、後年哲学者として新カント派の紹介などを行った藤岡蔵六も、評判を聞いて岡田式静座法に取り組み、念願の健康を回復したと、その著『父と子』[12]に記している。この本は私家本で、なかなか眼に触れ難い。そこで長くなるものの同書「九六　岡田式静座法」の箇所全文を以下に引用しよう。

中学時代参禅を拒まれ、一高入学以来運動を中止した私に取って、座禅と運動とを兼ねた一つの良い方法が見付かった。それは岡田式静座法である。この静座法は岡田虎次郎（ママ）と言う米国帰りの先生が創始したもので、先ず正しい姿勢を執って日本流に行儀良く座り、逆式呼吸を行って下腹部に自然に力が入るようにする、両手は組み合わせて下腹部に当て、瞑目して何思うこともなく座っていると、何時の間にか全身の重心が下腹部に安定して身も心も落着いた快い気持ちになる。其時組み合わせた両手は自然に動き出して軽く下腹部を打つ、或は首を振り、或は上体を前後左右に動かすなど人により様々の運動をする、中には座ったまま跳ね上る者もあり前進する者もある。名は静座と言うが実は動座であって、一種の室内運動法である。

門弟の中には、其肉体的方面を重んずる一派と精神的方面を重んずる一派とあったが、先生自身は霊肉一如と言ってその孰れにも偏しない態度を執っていた。併し実際は肉体的方面が主となり、精神的要素が乏しかったので、其点私は物足りなく感じた。逆式呼吸に就ては、医者の間にも多くの異論があって、二木博士（注、細菌学者二木謙三）などは反対派の急先鋒であった。私自身の経験から言うと、逆式呼吸は準備段階として或程度の効果を現したが、之を平生の呼吸に変えて仕舞うことは宜しくないように思った。　此の静座法の一般的練習は、毎日早朝日暮里の或寺の広い室で催された。先生自身其寺へ出張して、小高い台の上に座り、参集者は先生と向い合って座った。大抵三十分乃至一時間位練習した後で、先生は色々な人の質問に答えたり姿勢を直したり、また気が向くと色々な話をされた。其話が中々面白かった。私は毎朝早く起きて日暮里へ行き、静座が終ってから寮へ帰って食事をした。

　此静座法は何となく自分の性格に適したように思われたので私は熱心に修行した。そのお陰かどうかはっきりとは言えぬが、病後の私の健康はすっかり恢復して、寒い東京の冬にも感冒一つひかず、滅多に足袋も穿かないで過すことが出来た。

　藤岡蔵六は「そのお陰かどうかはっきりとは言えぬが」との付帯事項を添えるものの、「岡田式静座法」の効用を自己の病の回復と絡めて、肯定的に書いているのである。

率直な鑑三の話

　鑑三も難病に苦しむルツの治療のため、岡田虎二郎を柏木の自宅に招いていた。このことは、柏会のメンバーの一員であった矢内原忠雄の「日記」（一九一一・一二・二三付）に出てくる。わたしの前著『評伝矢内原忠雄』（新教出版社、二〇一九・四）では、そのほぼ全文を紹介しているが、ここではその一部を引用するなら、以下のようである。

　祈りに関する二三の会話あり。ある人その妹につきて暗示療法（？）の反応をのべて祈りのとどく実例かと話されしに対し先生厳として曰はるゝ様、この区別は明にせざるべからず、なるほどその療法とやらも反応ありてなほるかもしれず、又岡田の静座法の如きもその効果は疑ふべからず、しかれども余等はわれらの神ヱホバにいやして貰ひたき也。この事は娘の方が早く気がつきたり、実は余も岡田を招きたるものなるが、娘はあんなものになほして貰ひたくはない、神様になほして頂きたいといひしにより余は大いに恥ぢる次第也。なほることは外でもなほらん、たゞ肉のなほると共に霊の健かとなるはわれらの神ヱホバの外には求むべからず、エリヤの雨をふらしたると、他の人々が降らせたるとは大変な違ひなり、聖書にもにせ預言者多く出でてふしぎなる業を行ふとあり、

　鑑三は「岡田の静座法の如きもその効果は疑ふべからず、しかれども余等はわれらの神ヱホバにいやして貰ひたき也」と言ったと矢内原忠雄は書く。さらに鑑三は語を継いで、「実は余も岡田を招き

たるものなるが、娘はあんなものになほして貰ひたくはない、神様になほして頂きたいといひしにより余は大いに恥ぢる次第也」と参会者の前で、率直に語ったとする。この鑑三の開けっ広げの話に圧倒された矢内原忠雄は、この日の日記の終わりに、「吾人は神を父として仰がず、故に祈りに熱誠なきなり、必ずきかるゝとの確信なき也、「是非に」との意気ごみなき也。――ああ余は駄目なり、死せり死せり、矢内原忠雄は死せり」と書きつけている。師内村鑑三の信仰から来る真摯な態度に比べて、自己の卑小さ、駄目さ加減を、見て取っていたのである。

娘の死を目前に、鑑三が動転していたことは確かだ。が、こうした中でも鑑三は、自身の使命とした聖書研究と伝道を忘れない。春から夏にかけての『聖書之研究』には、ルツの介護にかかわることから生まれた体験談的なものが多い。また、すぐれた聖書注釈の文章も見出すことが出来る。「詩篇第百三十六篇」（『聖書之研究』第一二八号、一九一一・二・一〇）と題した文章がある。その「略註」は、自身の体験をも含んだものとなり、「詩篇第十二篇」（『聖書之研究』第一二九号、一九一一・三・一〇）の「略註」もまた、その体験のにじみ出たものとなっている。

岩手県花巻での高橋つさ子の葬儀から急遽帰宅した鑑三は、担当医からルツの死を宣告されたという。十二月八日付青木義雄（注、栃木県宇都宮の弟子、後年下野実業銀行取締役となる）宛書簡には、ルツに関しての病状について、「毎日死と戦ひ居り候、去る四日医師には死を宣告致され候、然し医師以上の大医師あるを知れば小生等は失望仕らず、最終まで希望を以て療養を加へ申すべく候。／何れにしろ此世は死の陰、涙の谷に有之候、決して永住の処には無之候」と書き記す。

ルツの葬儀

内村ルツは、鑑三一家の祈りと手厚い看病にもかかわらず、一九一二（明治四五）年一月十二日午前零時十三分、「モー往きます」の一言を発して息を引き取った。臨終の約三時間前鑑三はルツに洗礼を授けた。当日（一九一二・一・一二）の日付で青木義雄宛てに出した手紙に、鑑三は「娘ルツ事昨夜零時十三分終に永眠致し候、最も落附（ママ）いたる最後に有之候、小生の心に今や断腸の思ひあり、然れども彼女は今は神の懐に在りて安全に有之候」と書いている。

葬儀は翌日の十三日、今井館聖書講堂で行われた。葬儀次第と埋葬式の次第は、斎藤宗次郎の『恩師言　内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』[13]に詳しい。柏会や白雨会のメンバーの多くは出席した。この日矢内原忠雄はルツの葬儀と埋葬式に出席し、その感想を当日の日記に、以下のように記している。一部を引用する。

十二日午前一時すぎルツ子孃召さる。十三日（土）その葬儀あり。余も席末に侍す。孃や年十九、将に開かんとせし梅の花、春を待たで散りしこそうたてけり。然れども内村先生はかくは述べられざりし也。先生は曰く、孃も幸にキリストがわかりたれば此の世の御用も終りたりと見え主に召されたるなり、若し此の世にありたらば結婚の年頃にして随分苦労ありしならんも神は特に路得子をあはれみてこれを天に召し給へり、今のあつまりは葬ひの式にあらずして天国へ嫁入りする式なりと。あゝ然れども――余は喜びの涙か、悲の涙か、これを知らずただ熱

涙の滂沱たるを覚えしのみ。ただ涙のみ、涙のみ、その当座余は涙より外に考ふる余地なかりき。柏木より送りて雑司ヶ谷の墓地に至り会衆の讃美歌の中に棺は墓の中に沈み行く、先生先づ土塊を投じて曰ひ給ふ様「万歳万歳」と。あゝ何の涙ぞしかく滂沱たる！　雑司ヶ谷、空青く木立しげれる中に、「花散り失せては」の歌の嫋々たる中を静かに棺は下り行く。万歳と呼ばれし先生は笑を湛へられしも、あゝその御顔はおとろへ御姿は疲れて如何ばかりかの御奮闘ぞや。あゝ感慨無量。更にルツ子嬢の信仰を聞けば吾人誠に冷汗背を沾すを覚ゆ。

近く十九歳の誕生日（一九一二・一・二七）を迎えようとしていた、純情な青年矢内原忠雄の率直な感想である。彼がこの後展開される鑑三の再臨運動に同情的であったのも、ルツの死とその葬儀に出席し、鑑三の言動を間近に見ていたからに他ならない。

四　紙上の教会と再臨信仰

紙上の教会

前後するが、当時の内村鑑三の活躍の舞台とも言える場は、大まかに言うと、地方講演と東京柏木の今井館聖書講堂における聖書研究と講演、それに毎月十日刊行の雑誌『聖書之研究』の刊行にあった。聖書研究と地方講演は、鑑三にとってキリスト教を広める大事な仕事であるばかりか、生活の糧を得る源泉ともなっていた。それに伴い『聖書之研究』の定期刊行と発行元聖書研究社の運営は、当時の彼の大きな課題であった。鑑三の言う「紙上の教会」が、ここに展開することとなる。[14] 無教会キリスト教は、雑誌『聖書之研究』と共にあった。それがここに、大きく羽ばたく。「紙上の教会」について鑑三は、「我が教会」[15]と題した断章で、以下のように説明する。全文を写し取ることにする。

我にも亦教会あり、手を以て作りたる地上の教会あり、然れども是れ木と石とを以て作り、教壇と座席とを備へたる教会ならず、我教会は黒と白とを以て作れる紙上の教会なり、其牧師は著者にして、会員は読者なり、最も簡単にして最も廉価なる教会なり、而かも最も鞏固なる教会なり、木と石と神学と信仰箇条とが壊れて後に尚ほ存る教会なり、紙の上の教会なりと雖も花崗岩を以て作りたりよりも優かに耐久的の教会なり。

基督教は素より斯かる教会なりし、基督教会は天主教会又は聖公会又はルーテル教会たる前に一巻の聖書なりし、而して人の作りし是等の教会が、悉く仆れて後に、紙の上の教会なる聖書として存るべし、神は永久的の教会を石と煉瓦とを以て作り給はずして、之を朽ち易き紙の上に築き給へり。

然れば我も亦我教会を紙の上に築かんかな、而して木と石とを以て作りし教会が悉く朽果てん後にまで存らんかな。

写し取っていて、鑑三の意気に圧倒される。引用した箇所の前半で、鑑三は教会というものの本質を衝く。彼は「木と石とを以て作り、教壇と座席とを備へたる教会」（注、木と石と煉瓦などで構築され、屋内の座席なども立派で、外観の壮麗さを誇る建築物としての教会）と、「黒と白とを以て作れる紙上の教会」（注、インクとペーパーから成る、雑誌

や書物によって信者に伝道する教会）とを対比させる。そして紙（ペパー）の上に築く「紙上の教会」の優位性を説くのである。その上で「紙上の教会」は、「木と石とを以て作りし教会が悉く朽果てん後にまで存（のこ）らんかな」と高らかに宣言する。ここでの対比は分かりやすい。

赤江達也の『「紙上の教会」と日本近代　無教会キリスト教の歴史社会学』[16]は、右のような鑑三の伝道方法に関して、「内村は『聖書之研究』というメディアによって聖書の研究の場を創り出すことで、内村は「教会」にも「大学」にも属することなく、いわば在野の研究者となるのである」と明快に論じる。

むろん既成教会も雑誌や書物による伝道を試みている。が、カトリック教会はむろんのこと、プロテスタントの諸宗派の教会も、まま、「木と石とを以て作り、教壇と座席とを備へたる教会」にあこがれ、そうした建物を持ち、そこに集まる人の多いことが教会としては大事（注、それを教勢と称し、統計で示す教派が多い）で、魂への伝道という本来の目的を見失うことがあった。鑑三はそこを衝く。引用箇所の後半で、鑑三は「紙上の教会」の優位性を強調し、「基督教は素（もと）より斯（か）かる教会なりし」と言い、「基督教会は天主教会又は聖公会又はルーテル教会たる前に一巻の聖書なりし」と分かりやすく説く。『聖書』とは旧約・新約合わせて六十六巻の書物を指す。鑑三はこの書物としての『聖書』の研究に生涯を捧げることになる。「紙上の教会」は、以後鑑三の弟子達によって、それぞれの伝道雑誌として誕生し、その方法による伝道は、二十一世紀の今日まで踏襲されている。

ちなみに本章は、新型コロナウイリスの蔓延で、緊急事態宣言が発令され、自粛生活が求められる中で書いているが、世界各国のキリスト教会は、この時期、オンライン礼拝を余儀なくされている。むろん対面礼拝は大事だが、コロナ下の礼拝として編み出されたオンライン礼拝は、これまでも病床生活にあって、あるいは仕事を抱え、定時刻の礼拝に出席できなかった人々への朗報となっていた。その意味からすると、鑑三の説いた無教会主義、「紙上の教会」は、現代のオンライン礼拝の先蹤（せんしょう）とも言える一面をも担っていたのである。

けれどもオンライン礼拝は、コロナウイリス回避のため生まれたものであり、状況が好転するならば、一部を残し、大勢は対面礼拝に戻るであろう。が、鑑三の唱えた「紙上の教会」には、本論「第六章二　無教会主義の源流」で考察したように、「新約聖書」のイエスの教え、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（『新共同訳聖書』「マタイによる福音書」18～20）が意識されている。それを実質的に支えるのは、鑑三のばあい雑誌『聖書之研究』であり、それが「紙上の教会」と言うことになる。

「紙上の教会」の伝道方法

「紙上の教会」の伝道方法は、鑑三の場合聖書研究社という会社（出版社）を立ち上げ、『聖書之研究』はむろんのこと、自身の著作や他者のすぐれた論考をも刊行するという離れ業として展開した。そのいい例は少し後のことになるが、弟子の矢内原忠雄の処女出版にも見られる。前にも少し触れたが、これは大学卒業後、住友の別子銅山に勤務した矢内原が、伝道のためにと夜を徹して『基督者の信仰』という謄写版刷りの冊子を作る。これを、新居浜で矢内原と

一緒だった山下陸奥（歌人）が鑑三に見せると、即刻、聖書研究社からの刊行が決まったという逸話として伝わる。当時矢内原忠雄は、イギリスのロンドンで在外研修中であったが、ロンドンの下宿で、刊行された五冊の自著を受け取り、鑑三の「序文」を読んで、深く感動する。

鑑三は聖書研究社を雑誌『聖書之研究』を刊行するだけの存在とせず、そこに寄稿した自身の原稿を集め、本にするばかりか、いいと思われる他者の原稿があると、それを聖書研究社から出すこともあった。むろん印税もきちんと払ってである。こういうところ鑑三は、実にしっかりしていた。

後年、藤井武や畔上賢造が聖書研究社で専任同様で働いた時も、それにふさわしい賃金を払っている。それは札幌農学校時代に学校の指示で農業実習に励んだ時に、僅かながらの給付を受けたことや、アメリカ留学時代に労働に対する報酬が如何なるものであるかを、自然に学んでいたことから来たのであろう。鑑三は決して「奉仕」という名の下での、ただ働きはさせない。彼はボランティアの美名の下での仕事には、数々の問題があることを知っていたからである。その面でも彼は先駆者であった。

鑑三は雑誌『聖書之研究』を通し、「伝道金」の募集をした（『聖書之研究』一一九号、一九一〇・五・一〇）ところ、二七五円が集まったことを翌月の『聖書之研究』で報告し、それを伝道旅行の費用や配布資料代、独立伝道者の補助費に用いると公表している。前章で述べた「角筈パンフレット」などの刊行や柏木のルーテル館の改装は、この「伝道金」で賄われたものと思われる。鑑三はそれまで経済的苦労を負い続けてきたが、五十歳を越えて、やっと経済的自立を果たすようにもなっていた。その基本は事業としての聖書研究社の運営と、「伝道金」名目の募金、それに鑑三の講演に惚れ込んだ信徒たちの献金にあった。

デンマルク国の話

本筋に戻ろう。鑑三の愛嬢ルツの死前後数年の生活は、なにかと多忙を極めた。それはルツの生前と死後とに截然と分かたれる。角筈から柏木への転居（一九〇七・一一）、今井館の落成による聖書研究会の拡大、『聖書之研究』の一〇〇号突破、柏会、白雨会など、鑑三を慕う青年たちのグループが生まれるなど、鑑三は指導者として輝いていた。

「デンマルク国の話」（『聖書之研究』一三六号、一九一一・一一）は、ルツ生前の一九一一（明治四四）年十月二十二日に柏木の今井館で話されたものである。矢内原忠雄の当日の記録「内村先生「柏木今井館聖書講義聴講ノート」」（『矢内原忠雄全集』第二十四巻収録。四三七ページ）によると、「一三日前より病人（御息女）が容態あしく為に本日は準備もしてなければ一のお話をして今日の説教にかへん、乞ふ諒せられよ」との弁明の辞があって、話に入っている。『聖書之研究』に載せられた時には、副題に「信仰と樹木とを以て国を救ひし話」が添えられた。

すでに触れたように、鑑三の娘ルツは当時病床にあり、しかも重体であった。鑑三はその介護にも当たり、多忙を極めていた。しかし、日曜日の集会（聖書講義・説教）を休むわけにはいかない。優秀な一高生（柏会や白雨会のメンバー）も来る。鑑三はそこで手持ちの話を、イザヤ書35章1～2章を枕にはじめた。イザヤ書35章1～2章

とは、現代の『新共同訳聖書』で示すなら、以下のようである。

1荒れ野よ、荒れ野よ、喜び躍れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ
野ばらの花を一面に咲かせよ。

2花を咲かせ
大いに喜んで、声をあげよ。
砂漠はレバノンの栄光を与えられ
カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

矢内原忠雄は、イザヤ書35章冒頭1～2章を、文語訳『聖書』を用いて正確に書き写している。なお、当日の話を基とした『聖書之研究』に載った「デンマルク国の話」は、四〇〇字詰原稿用紙二十五枚ほどのごく短い講演原稿だ。が、鑑三の話術にかかると、すべては立派な一編のドラマとなる。

「デンマルク国の話」は、今は岩波文庫その他にも収録されているが、朗読にも十分耐える文章である。内容は戦争で二つの州を失ったデンマークが、ダルガス親子の信仰と努力とによって、残された荒れ地に樹を植え、豊かな国土に化した物語である。『内村鑑三全集18』の「解題」（担当鈴木範久）には、「内村鑑三が、デンマークのダルガスの話を、はたしていかなる文献によって知りえたのか、いまだ明らかではない」とあるが、鑑三がヨーロッパの小国デンマークに寄せる関心は、尋常ではなかったことは確かだ。

「デンマルク国の話」は、鑑三の主宰した聖書研究社から翌々年の一九一三（大正二）年二月二十一日付で刊行された。片々とした小冊子ながら、書物の形態で出たことで、内容の豊かさと相俟って、一定の読者を得た。後年鑑三は『国民新聞』（一九二四・九・一九、二一）に「西洋の模範国デンマルクに就て」の一文を寄せ、「此小冊子が思ひ掛けぬ所に於て、思ひ掛けなき人に依て読まれまして今日まで私の知る範囲に於て、此小冊子に感激して幾人かの同胞が起ち、或（あるひ）は己が所有の土地に樹木を植るあり或は官職に在りて一層植林を奨励する者がありました」と書く。さらに語を継いで「多分此小冊子の感化に由りて、日本内地並に朝鮮に於て何百万本と云ふ樹木が植ゑられたらうと思ひます」とも附言する。

その上で「此は私が日本国の為に為すを得し最善の事業」とまで書き付けているのである。得意そうな鑑三の風貌さえ浮かんで来る。最後の部分で鑑三は、「日本は元来農本国である。今より大（おほい）に丁抹国（でんまーくこく）に学んで、農を以て強大なる平和的文明国たるべきである」と説く。こんなところにも、札幌農学校時代の学びと平和主義が読み取れる。

なお、「デンマルク国の話」を採り上げ、「（この話は）現実の樹木を植える話であるが、柏木の地に集まった若い人々の魂に、鑑三は、その愛する日本のため、信仰という心の樹木を植え、水を注ごうとしたのだった」という鈴木範久の斬新で的確な指摘[17]があることも言い添えておきたい。ついでに本作は、一九三四（昭和九）年刊行の岩波中等教科書『国語』巻三に「興国の樅」の題名で載り、第二次世界大戦後には、文部省編纂教科書『国語』六学年（上）に「みどりの野」として、多少手直しされたものが採用されていることも付

記しておく。

モアブ会と各地への伝道の旅

鑑三は娘ルツの死後一ヶ月、その記念会（二月一二日）や記念茶話会（同一三日）を開いている。記念会には女性の出席者が多く、その女性たちを中心に、やがてモアブ会が生まれる。鑑三の命名である。モアブとは「ルツ記」に見られるルツの出身地である。記念茶話会の方は、夜に開かれ、男性の出席者が多かった。当夜、この茶話会に出席した一高生矢内原忠雄は、当日の日記に「夜六時より柏木先生のお宅にてルツ子様記念（一ヶ月）茶話会あり、不肖等もそのその席末に侍するの栄を得たり、先生はまるで人種が別の様な気がす。わが身のくだらなきこと！」と彼は記している。[18]

鑑三はルツの死後、日曜日の聖書研究会では、「ヨブ記」を講義し、その災難（試練）の意味を考えようとしていた。また、三月十七日の日曜日には、千葉県長生郡一宮町に行き、一宮小学校で「家庭と宗教」の題で講演をした。一宮は鑑三の若き日からの伝道の地であった。講演の旅は、ルツの死を一時忘れるためにも意味があったようだ。

春になると、「日本の花嫁事件」[19]で、日本基督教会の牧師職を解職された田村直臣（なおおみ）の数寄屋橋教会で、田村が留守の際には、しばしば説教を担当し、「マタイ伝」や「四福音書に就て」の話をしている。無教会主義を標榜し、どの教派にも所属しなかった鑑三は、日本基督教会から譴責処分（戒規）を受け、教職の身分を剥奪されていた田村直臣の教会で講演（説教）をするのも、問題はまったくなかった。無教会主義の制度（憲法や規則）の欠如は、逆説的言い方になるが、この場合有効に働いたのである。

同年（一九一二）六月、鑑三は群馬県の伊香保温泉に行く。伊香保は万葉の時代から人々に知られた温泉で、徳冨蘆花の好んだ温泉地でもある。現在は徳冨蘆花記念文学館もあるが、鑑三もまた故郷高崎にも近い、この地の温泉を好んだ。当時伊香保には蓬莱館というホテルがあり、鑑三は校正その他の仕事があると数日滞在するのが常であった。この時は、『東京独立雑誌』に載せた文章を集め、『独立短言』という一書にするためであった。この本は、警醒社書店から一九一二（明治四五）年七月十五日の日付で刊行されている。同書中扉には、「陸中花巻、北上河の畔（ほとり）に彼女の骨を埋めし故高橋ツサ子の霊に告ぐ」にはじまる献辞が見られる。鑑三には相次いで天に召されたツサ子とルツが何時になっても忘れることができないのであった。

同年六月二十一日、伊香保から帰宅した鑑三は、白雨会のメンバーで、東京高等商業学校の学生佐藤禎一の不慮の死を知る。佐藤は鎌倉で投身自殺をしたのであった。鑑三は自分にも責任があるとの思いに満たされる。八月十九日には、忠実な弟子斎藤宗次郎の妻スエ子の死を知らされ、弔電を打つ。死は当時の鑑三の周辺に満ちていた。そうした中で彼は聖書研究会と地方伝道に力を注ぐ。中でも札幌への伝道の旅（一〇月一一～二〇日）は、その最大の行事となった。

札幌伝道には青木義雄・淺野猶三郎・斎藤宗次郎・中田信蔵・森本慶三らが同道した。札幌滞在中は、札幌独立基督教会などで、ロマ書やヨハネ伝を用いての講義や説教を行っている。クラーク会堂というクラーク館の建設の提案も、札幌滞在中の大きな仕事であっ

たと言えよう。東北帝国大学農科大学と名を変えた旧札幌農学校でも講演を行っている。札幌行きは十年振りのことであった。娘ルツ子の死の痛みを癒やす意味でも、若き日を送った札幌の地はふさわしかった。

旧友宮部金吾の熱心な誘いもあって実現したこの札幌行きでは、主として「ロマ書」について語った。のち『羅馬書の研究』（向山堂書房、聖書研究社、一九二四・九）として結実する研究の萌芽が、この旅の講演にあったと言えようか。この札幌行きに際して、鑑三は雑誌『聖書之研究』に広告を出し、各地の読者にも参加するよう呼びかけていた。

津山への伝道旅行

岡山県の津山への伝道旅行は、ルツの死亡した年（一九一二、明治四五・大正元）の十一月のことである。津山は右の札幌伝道にも参加した森本慶三の故郷である。十一月十四日の夕方、鑑三は中田信蔵らを伴い、岡山へと向かう。岡山駅に着くと、森本が出迎えてくれた。中田信蔵は独立伝道者で、鑑三の忠実な弟子でもあり、書記役として随伴したのである。彼がこの時記録した「津山講演記」（鑑三の津山と帰途立ち寄った各所での記録）は、『聖書之研究』第一五〇号（一九一三・一・一〇）に、報告として載っている。

以下中田の「津山講演記」によると、津山には十八日の朝までおり、その夜は兵庫県明石の医師湊 謙治宅に泊まる。湊 謙治も鑑三の熱心なファンの一人であった。十九日は京都入りし、鑑三の妻しづの実家岡田家に泊まる。翌日の夜は、岡田家で『聖書之研究』読者懇親会を開いている。岳父岡田 透も出席した。彼もこの頃には鑑三の導きで信者に同情を示すようになっていたのである。この夜の集会には、前年、東京帝国大学法科大学を卒業、京都府に官僚として赴任していた藤井武も出席した。藤井はこの頃から官僚生活に限界を感じており、四年後、鑑三の許に走り、聖書研究社の仕事をする一方、聖書研究に没頭、無教会伝道者となる。

前章でちょっと名をあげた畔上賢造が県立千葉中学校（現、県立千葉高等学校）の英語教師を辞め、鑑三の聖書研究社の社員として働くようになるのは、一九一一（明治四四）年秋頃からのことである。鑑三と畔上賢造のことは、次章「第十一章　再臨運動と『羅馬書の研究』」の第二節、「三人の弟子 藤井武・畔上賢造・塚本虎二」で、詳しく述べることにしている。

札幌から帰った翌年の一九一三（大正二）年二月五日付で、鑑三は『所感十年』を聖書研究社から刊行した。巻頭の「自序」に鑑三は、「所感」の意味を論じて「真性の所感は神の霊が人の霊に触るゝ時に生ず、唯憾む楽器の不完全なるを以て天の美曲を完全に伝ふる能はざることを」と書く。また「附言」には「本書の編纂は畔上賢造君専ら余に代て其任に当られたり、茲に君の多大の労を深謝す」の一項が書き添えられている。内容は鑑三が過去十年『聖書之研究』に載せた短文の主なものを集め、一本にしたものである。鑑三には、短文ともいえ捨てがたいものが多い。畔上賢造は『聖書之研究』を精査して、大事なものを拾い集め、「神」「基督」「聖霊」「聖書」「信仰」「愛」「恩恵」「平和」などに分類し、一本にしたのである。例えば「独立」の項には「プロテスタント主義」というタイトルの文章が収められているが、以下のような文章を見出す。

余輩は今尚プロテスタント主義を把持す、之を把持して天主教会、希臘教会、英国国教会に反対す、プロテスタント主義は進歩主義なり、之を棄るは進歩の趨勢に背馳するに等し、余輩は歴史が逆行せざる以上はプロテスタント主義を棄てざるべし。余輩はプロテスタント主義を把持す、然れども今の所謂プロテスタント教会に与せず、彼等は能く此主義を代表する者にあらざれば也、プロテスタント主義は之を其論理的結極まで推し行かば無教会主義とならざるべからず、法王、祭司、監督の教権を拒む者は論理上すべての人の教権を拒まざるべからず、プロテスタント主義は人を直に神に繋ぐ者なり、其間に長老、牧師、執事等の介在するを許さゞるなり。

これは見事な無教会主義の説明と言ってよいであろう。しかも、既成教会への挑戦状でもあった。それにしても『所感十年』は、こうした鑑三の考えを逃すことなく捉えている点でも、畔上賢造の力量が評価できる編集だ。なお、鑑三は、娘ルツ没後も休むことなく、毎週日曜の聖書研究会の開催、雑誌『聖書之研究』の編集、そこに載せた自身の文章の書籍化、各地への伝道旅行、さらには彼を慕う人々の小グループ団体指導と、忙しい生活を送っていた。

世は明治から大正へと変わり、一九一〇年代に入っていた。欧米留学からの新帰朝者吉野作造が『中央公論』に盛んに寄稿するようになった。吉野は「民本主義」なる新造語を採用し、普通選挙の実施、貴族院の権限縮小を提言、そして軍閥の横暴を攻撃した。吉野はやがて『中央公論』一九一六（大正五）年一月号に、「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を書き、論壇に大きな波紋を投じることとなる。

第一次世界大戦の勃発

こうした中でヨーロッパを主戦場とした第一次世界大戦がはじまる。一九一四（大正三）年六月二十八日にオーストラリア皇太子夫婦がボスニアの首都サラエボで暗殺された。この事件を契機に戦争がはじまる。七月二十四日から二十五日にはロシアが一部動員を行い、二十八日にオーストリアがセルビアに宣戦布告すると、ロシアは三十日に総動員を命じ、ドイツはロシアに最後通牒を突き付けて動員令を解除するよう要求、それが断られるとロシアに宣戦布告をした。ロシアは三国協商を通じて、同盟関係にあるフランスに西部で第二の戦線を開くよう要請、フランスはロシアの要請を受け入れて、八月一日に総動員を開始、三日にはドイツがフランスに宣戦布告した。独仏国境は要塞化されていたため、ドイツはシュリーフェン・プランに基づきベルギーとルクセンブルクに侵攻、続いて南下してフランスに進軍した。八月四日にはイギリスがドイツに、イギリスと同盟を結んでいた日本も八月二十三日にドイツに宣戦布告し、参戦する。

戦争参加によって、日本は漁夫の利を得たとされる。貿易額は四倍にふくれあがり、輸入超過国は一転し、輸出超過国となり、重工業が画期的に発展し、海運業も伸び、いわゆる船成金が誕生する。日本資本主義は、第一次世界大戦により一時的に大発展したのであった。が、大戦末期、陸軍大将寺内正毅が首相として行ったシベリア出兵は失敗し、国民に多くの負担を掛けることになる。最大七万人以上を派兵した日本軍の経費は、駐留が長くなったこともあっ

て、容易ではなかったからである。

内村鑑三は戦争がはじまるや、日本基督教会角筈レバノン教会で、「欧州の戦乱と基督教」の題で講演し、「要点」と銘打ったものを『聖書之研究』（一七二号、一九一四・一一・一〇）に掲載した。そこでは「戦争は悪事」と断じ、「国家は戦争に従事して、負けるも勝つも神の刑罰を蒙りつゝある」と断じた。また、戦争最中には「欧洲戦争と基督教」を『聖書之研究』（一九四号、一九一六・九・一〇）に載せ、冒頭「今回の欧州戦争は基督教の大打撃である、之に由て其信用は地に墜ちた」と書く。その上で「余輩の信仰は今回の戦争に由て壊たれない」と言い、「之に由て壊たれたる者は教会の基督教であつて、聖書の基督教ではない、然り聖書の基督教は此戦争に由て更らに固く建てらるゝのである」という自説が強く語られる。彼はアメリカやヨーロッパ諸国の都市に見られる壮大な建築に代表されるキリスト教を否定する。鑑三は、聖書研究を第一とする「紙上の教会」こそ、真実な教会だと言うのである。

再臨運動の背景

一九一八（大正七）年に開始される鑑三の再臨運動の背景は、これまで見てきたように、娘ルツの死（一九一二・一・一二）、第一次世界大戦の勃発（一九一四・七・二八）、それにアメリカ留学時代に知り合った年上の友、D・C・ベルから送られてきた『日曜学校時報』（*Sunday School Times*）の記事にあったというのが、一般的見方である[20]。そこには「キリストの再臨は果たして実際的問題であるか」とのC・G・トランブルの一文があり、それにヒントを得たというのである。

娘ルツの死後、鑑三は柏木の聖書研究会に力を入れる。彼は新渡戸稲造の紹介で集うようになった優秀な若き学徒に期待することが大きかった。また、地方伝道に精を出し、機会があると出来るだけ行くようにした。さらに『聖書之研究』の刊行に力を入れ、そこに載せた自身の文章は、何らかの形で著書にするのが常であった。鑑三はすでに五十の坂を越えていた。そうした中で、彼は再臨運動にのめり込む。それは世の動向と神への信頼、娘ルツの死という厳粛な事実に支えられて展開する。

ここで、改めて再臨とは何かに立ち返りたい。それはイエス・キリストが世界の終わりの日に再び現れ、世を裁き、神の国を確立するという信仰といったらよいであろうか。世界のプロテスタント各派の多くは、教派独自の信条を持つが、多くは再臨を規定する。例えば日本の各派プロテスタント教会には「使徒信条」があり、同時並行的に用いられるニカイア信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）でも、「主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。その国は終わることがありません」と再臨をはっきり規定している。再臨信仰は、キリスト教の歴史をたどれば、常に存在した。再臨は突然に来るとも考えられ、忍耐と同時に、来る時期を警戒しながら、待たれるものとされた。いわゆる再臨待望の願いである。が、プロテスタント系の教会では、「使徒信条」に明記されていても、説教においては特に強調されることはない。

鑑三は一九一七（大正六）年十月三十一日夜、宗教改革四百年を覚えての講演を、東京神田基督教青年会館で、「宗教改革の精神」と題して行っている。その講演草稿は『聖書之研究』二〇八号に載った。現在は『内村鑑三全集23』に収録されている。鑑三はこの

講演を「新文明又は新世界又は新時代は一五一七年十月三十一日を以て生れたのである」ではじめる。続いて「一五一七年のルーテルの羅馬法王庁発売の赦罪券（注、免罪符に同じ）反対を以て近代史は始まった」とする。さらに「此年此日を以て近世哲学と近世思想、近世科学と近世文学、代議政体と新国家其他近代人が享有する凡（すべて）の制度文物は始まつたのである、祝すべきは実に此日である」とも言う。

格調高い宣言ともいえるものが、ここに見出せる。講演草稿を貫くのは、「ルーテルの宗教改革は聖書の再発見」の立場である。鑑三は宗教改革は、「パウロの信仰の復興」であり、「羅馬書並に加拉太（ガラテヤ）書の再発見」にあるとする。語を換えるなら「パウロの信仰の復興」である。草稿は、「霊が肉に勝ち、愛が武力に勝ち、全人類が更らに復び再生の実を挙げんが為には、イエスを神の子と信ずるの必要があるのである」で結ばれる。鑑三の場合、演説草稿は演壇に上がると、その独特の風貌・弁舌と相俟って、より効果を発揮するのであった。

注（1）内村鑑三　岩本信二宛書簡。一九〇八（明治四一）年一月一五日、『内村鑑三全集37』収録。二一六ページ

（2）内村鑑三　D・C・ベル宛葉書　一九〇七（明治四〇）年七月二二日、『内村鑑三日記書簡全集6』収録。一六九ページ

（3）斎藤宗次郎『恩師言 内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』教文館、一八八六年四月二〇日、一六九ページ。なお、斎藤宗次郎に関しては、近年研究が進み、二〇一八（平成三〇）年には花巻市博物館が、「斎藤宗次郎―花巻時代の足跡―」と題した企画展を開催し、同志社女子大学名誉教授の児玉実英の「祖父 宗次郎の思い出～三つのキーワード～」の講演もあった。今後、内村鑑三とのかかわりの深いこの人物の研究は、より深められるものと思われる。

（4）矢内原忠雄『余の尊敬する人物』岩波書店、一九四〇年五月三〇日、『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。一三四～一六六ページ

（5）藤岡蔵六『父と子』私家版、一九八一年九月（日付なし）、一五八ページ

（6）政池 仁『内村鑑三伝（再増補改訂新版）』教文館、一九七七年一〇月三〇日、四三三～四四〇ページ。高木八尺他編『新渡戸稲造全集 別巻』（再版）教文館、一九八七年四月一〇日収録。

（7）塚本虎二「先生に蝮の卵と言はれた「柏会」」『追想集 内村鑑三先生』一九三四年五月、のち『内村鑑三先生と私』伊藤節書房、一九六一年二月二五日収録。引用は後者による。八〇～八一ページ

（8）藤井 武「先生と私」『旧約と新約』一一八号、一九三〇年四月一五日。『藤井武全集』第一二巻収録。藤井武全集刊行会、一九三二年一月二五日、一一六～一四八ページ

（9）矢内原忠雄「十月一日」『嘉信』第22巻第10号、一九五九年一〇月二〇日。『人生と自然』東京大学出版会、一九六〇年一〇月二五日。のち『矢内原忠雄全集』第一七巻収録。七九一～七九二ページ。なお、ここでの引用は、初出『嘉信』発表のものによる。

（10）坂田 祐『新編恩寵の生涯』待晨堂、一九六六年八月一〇日一五六ページ

（11）田上 望『西坂のてっぺんの家で』キリスト新聞社、二〇一四年一二月二四日、三一ページ

（12）注5に同じ。一四八～一四九ページ

(13) 註3に同じ。一七三ページ～一七四ページ
(14) 赤江達也『「紙上の教会」と日本近代　無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、二〇一三年六月二六日
(15) 内村鑑三「我が教会」『聖書之研究』一四九号、一九一二年一二月一〇日、『内村鑑三全集19』収録。二九六ページ
(16) 注14に同じ。九一ページ
(17) 鈴木範久『内村鑑三』岩波新書、一九八四年一二月二〇日、一六二ページ
(18) 『矢内原忠雄全集』第二八巻『日記』、岩波書店、一九六五年六月一四日、二五三ページ
(19) 田村直臣の「日本の花嫁事件」と内村鑑三に関しては、小著『評伝矢内原忠雄』の第一二章「二　無教会主義」の「『日本の花嫁』事件」（五七六～五七九ページ）を参照して欲しい。
(20) 鈴木範久『内村鑑三』岩波新書、岩波書店、一九八四年一二月二〇日。小原 信『内村鑑三の生涯―日本的キリスト教の創造』ＰＨＰ文庫、ＰＨＰ研究所、一九九七年六月一六日など

受領日　二〇二二年一月一三日
受理日　二〇二二年六月　八日